

## 農事組合法人「妙楽ファーム」代表理事

## 城崎正継さん

## 明日へ向かって駆ける

## 農業法人の経営者は語る

「4人の同志で、法人を立ち上げて5年たった。『ふるさとで耕作放棄地を絶対に出さない』を合言葉に頑張ってきた。地元の方々の声が応援に変わってきたことが、励みになっている」と話すのは、京丹波町妙楽寺地区の農業組合法人「妙楽ファーム」代表理事の城崎正継さん(65)だ。

同地区は丹波高原の西部に位置する。「丹波黒大豆」や「瑞穂ほうれんそう」などの生産が盛んだ。昨年、京都縦貫自動車道が全線開通し、インターチェンジが近くにできたことから、交通アクセスが格段に向上。経済効果の期待も大きい。

10年前、Uターンして就農した城崎さん。農地は圃場(ほじょう)を整

備が完了していたものの、担い手の高齢化、後継者不足で耕作放棄地や空き家が増えていた。

「整備された農地を荒らさないため、新しい仕組みが必要だと考えた。JA京都瑞穂支店などに相談し、法人化を地区の全農家に呼び掛けた」と振り返る。

話し合いを重ねたものの、地域での合意は容易ではなかった。しかし、城崎さんと同じく他業種から農業に転身した上田三雄さん(68)、黒井

誠司さん(56)、大西治さん(53)が賛同。4人が発起人となり、2012年に同法人を設立した。

当初は、水稲1・38畝、ソバ22畝など1・9畝の経営面積でスタート。4人が所有する農機を持ち寄り、いろいろな作物を手探りで栽培しながら、耕作放棄地ゼロを目指して地域の農地を引き受けてきた。

法人化したもう一つの目的、担い手育成にも力を注ぐ。府の「担い手育成実践農場」を活用し、城崎さん

が指導者となって20代の男性の研修を受け入れた。今は独立就農を果たし、同法人の組合員として活躍している。

地道な努力が地域住民にも認められ、経営面積は8・7畝までに拡大。現在は水稲7・5畝をはじめ、「京かんざし」(金時にんじんの早取り)や「瑞穂ほうれんそう」「瑞穂大納言小豆」「丹波黒大豆」などの特産品作りに取り組む。

城崎さんは「私が描くふるさとの姿は、地場産の農産物を地元飲食店や学校給食に提供すること、空き家を利用して民泊や農業体験で定住者が増えて地域が元気になることだ。そのためにも町内の農業法人が連携して、いろいろな働き掛けができるよう取り組んでいきたい」と話す。



▶地産地消の取り組みや新規就農者の育成に力を入れる城崎さん

## 地元密着の農業目標

■法人所在地 京丹波町妙楽寺沖田14の3、(電)0771(86)0274。

■法人概要 2012年設立。理事3人、監事1人、パートタイマー2人(出荷作業時)。農地8・7畝(水稲7・5畝、畑30坪、ハウス3棟)。農機はトラクター・コンバイン各1台、もみすり乾燥機1台。